

空港における自然災害対策に関する検討委員会

【令和7年5月29日（木）開催】

主な意見

■各空港の「A2-BCP」状況

空港のモニタリング会議に参加していると、「A2-BCP」の対応事例またはヒヤリハットを空港の複数の部署と共有することで、各空港の取組が高度化してきている。また、港湾や鉄道との連携が進む空港もあり、良い方向に取り組んでいるとの認識。

災害対応事例について、少しでも課題があった場合は、それを洗い出すことが重要。

災害対応事例は、災害に対して A2-BCP の想定内で対応できた事例か、想定外で対応できなかったか、またはイレギュラーな事態が起こったが A2-BCP&M で対応できた事例及び関係機関との平時のコミュニケーションにより対応できたこと等をまとめることが重要。

滑走路とは別に運用できるヘリパッドは、災害時にも有効な施設のため、必要性だけでなく滑走路との離隔等を整理して丁寧に示すことが必要。

A2-BCP の改定状況、訓練の実施状況について、今後も適切にフォローアップしていくことが重要。

■空港における自然災害対策に関する検討委員会「分科会」の報告

南海トラフ地震で、大きな津波による浸水が想定されている高知や宮崎空港等は、周辺の空港が連携し助け合ってその地域の空港を運用することが重要。また、そこに住まれている方々の利便性を回復するため早期に空港を復旧するため、資機材確保等の検討が今後さらに必要。

空港の津波浸水想定は、都市部のハザードマップと同じ考えではなく、航空機が漂流しない浸水高を意識する等空港独自の設定、シミュレーションを行うことが必要。

検討した災害時の救援機のスロット数は、能登半島地震を参考としているが、東日本大震災の際には多くの救援機が駐機した。大都市が被災した場合を想定し、救難機の必要スロット数は再検討が必要。

空港の浸水については、よりリアルタイムの情報が大事であり、浸水シミュレーションは進んでいるため今後も引き続き検討していくことが必要。

津波により避難する航空機や旅客等に対して、情報を迅速に集め、その情報を分析し
いろいろなところに情報提供することがすごく大事な課題。

■今後の取組

広域連携は、空港や自分のエリアしか被害想定していなかったところを隣とか広域で
見たときにどういうニーズ生じるかを想定し、内容を検討することが重要。

空港の災害対策するにあたっては、一様に対策するのではなく、各空港のハザード及
び影響を考慮していくことが重要。

以上